

SD法の活用による中学校国語科俳句学習における感性評価の視覚化

Visualization of kansei evaluation on haiku study of national language subject in junior high school by use of semantic differential method

豊瀬 仁須^{*1,2}, 西野 和典²Kimitoshi TOYOSE^{*1,2}, Kazunori NISHINO²^{*1} 田川市立田川中学校, ¹ Tagawa municipal junior high school,² 九州工業大学, ² Kyushu Institute of Technology

Email: tagawa-j@city.tagawa.fukuoka.jp

あらまし：私たちは中学校国語科の俳句の学習でSD法を活用し、俳句の印象をグラフ化して生徒に示した。プロジェクタでスクリーン上に投影された感性評価のグラフによって、生徒は表現の違いによって感性評価が異なることを客観的・具体的に理解することが可能になった。また、異なる表現に対する感性評価には有意な差があることが認められた。

キーワード：中学校、国語科、俳句、SD法

1. はじめに

私たちは中学校国語科俳句学習に、SD法を導入した。SD法とは、「明るい」「暗い」などの対立する形容詞の対を用いての対象（本研究では俳句）が与える感情的なイメージを、5段階あるいは7段階の尺度を用いて判定する方法である。

俳句には様々な表現技法がある。例えば「切れ字」は『や・かな・けり』など、意味（文）の切れ目を示す語、句の中心となる作者の感動をこめる語である。⁽¹⁾である。しかし、このような説明は抽象的である。切れ字が使われている俳句から作者の感動が込められていることを感じるかは、個人の印象であり、これまでの俳句学習では客観的にこのような表現の効果等について検証することは不可能であった。

本研究では、SDアンケートを実施し、結果の折れ線グラフ（以下「SDプロフィール」）をプロジェクタでスクリーンに投影することによって、表現の違いによる印象の違い、及び、作品の違いによる印象の違いを視覚化する。印象の違いをSDプロフィールに視覚化することによって、生徒が表現の効果をより客観的且つ具体的に理解することが可能になると考える。

2. 先行研究

SD法を中学校国語俳句学習に導入した事例は報告されていないが、皆川は「俳句理解の心理学」⁽¹⁾で、SD法による俳句読解過程深化についての検討を行っている。皆川の実験では、平均年齢20.6歳の大学2年生26名を対象に、俳句の感想文を書かせる。感想文を書かせる前と書かせた後の2回、対象の学生にSDアンケートを行い、結果の分析を行っている。まとめのなかで皆川は、「感想文を書くことによって、俳句に対する自らの理解の観点のある程度方向付けることができ、そのことによって作者の表現意図をより正確に、かつ深く理解することが可能になっていくという、俳句理解の過程を説明するモデルを構築することができる。」とし、SDアンケ

ートを俳句理解の深まりの検証に使用している。

中学校国語科における和歌の学習では、SDアンケートと因子分析、及び、クラスター分析によって「和歌感性データベース」を構築した研究が報告されている。この研究では、使用感性語の比較および鑑賞文の採点結果から、実験群（和歌感性データベース使用）の鑑賞文の方が統制群（和歌感性データベース不使用）に比べて、より多くの形容動詞と形容詞を使うようになり、的確に書けるようになった⁽³⁾。

皆川の研究では生徒の俳句理解の深まりの検証にSD法を使用していることから、SDアンケートが生徒の俳句理解を反映するものであると言える。また、和歌感性データベースの研究では、SDアンケートを含む和歌感性データベースを使用することによって、生徒が的確に鑑賞文を書くことができるようになったことがわかる。本研究では、SDアンケートを行うことによって、俳句に対する生徒の理解の状態を視覚化することができると思われる。

3. 研究の全体構想

本研究の実験参加者は、本校3年生34名である。使用した教材は、「俳句の世界『俳句を味わうために』（三省堂）」⁽¹⁾である。

SDアンケートに使用した評定尺度となる感性語は、皆川が「俳句理解の心理学」第4章で使用している感性語である。使用した評定尺度を下に示す。

明るい—暗い、嬉しい—悲しい、温かい—冷たい
若い—老いた、瑞々しい—枯れた
迫力がある—迫力がない、激しい—穏やかな
男性的な—女性的な、大きい—小さい
速い—遅い、動的な—静的な
深みがある—深みがない
洒落ている—野暮ったい
おもしろい—つまらない
リズム感がある—リズム感がない

実験では教科書掲載の俳句と、その俳句の表現技

法等を使わない俳句等の SD アンケートをそれぞれにとり、SD プロフィールを比較する。

4. 授業実践と検証方法

授業実践は以下の通りである。

① 異なる表現の俳句の SD アンケートに回答させる。

- ・切れ字を使った表現と使わない表現の俳句
- ・助詞「も」を使った俳句と「が」を使った俳句
- ・「蛸」をモチーフにした俳句

② それぞれの俳句に対する SD プロフィールを示し、表現の違いによる印象評定の違いを確認させる。

検証方法は以下の通りである。

- ・SD プロフィールのグラフに違いを確認する。
- ・SD アンケート結果の有意差を t 検定で検証する。

5. 実験結果

切れ字のある俳句とその切れ字をなくした俳句とを比較して、SD アンケートに回答させた。

切れ字のある俳句

A さみだれや大河を前に家二軒

切れ字をなくした俳句

B さみだれで大河を前に家二軒

二つの俳句の SD プロフィールを下に示す。図中「A」「B」はそれぞれ上記の俳句をさす。

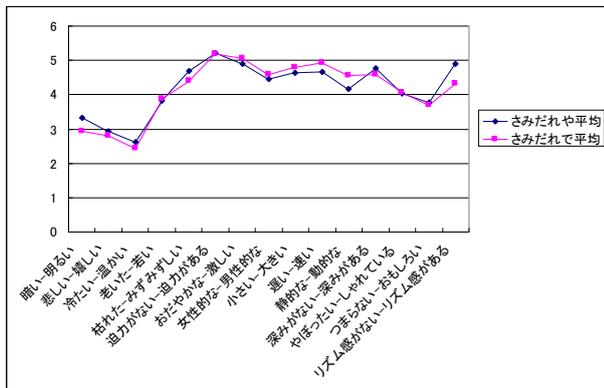


図1 切れ字を変えた俳句の SD プロフィール

印象評定に有意差は認められなかった ($p>0.05$) が、切れ字を使用した場合と使用しなかった場合とで、生徒が俳句から受ける印象が異なるものであったことが分かる。

次に、助詞「も」を使用している俳句と「も」を「が」に変えた俳句とを比較して、SD アンケートに回答させた

助詞「も」を使用した俳句

C 鶏頭の十四五本もありぬべし

助詞「が」を使用した俳句

D 鶏頭の十四五本がありぬべし

二つの俳句の SD プロフィールを図 2 に示す。図中「C」「D」はそれぞれ上記の俳句をさす。

印象評定には有意差が認められ、($p<0.01$) 助詞によって印象が変わることがデータからも明らかにな

った。

実験参加者である生徒たちには、図 1 及び図 2 をスクリーンに投影して提示した。生徒たちは、これらの SD プロフィールによって、表現によって印象評定が異なることを理解できた。

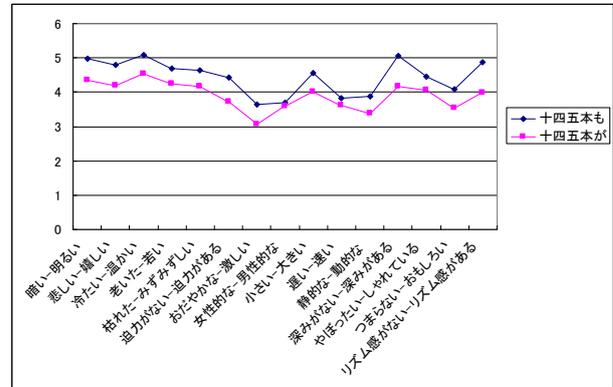


図2 助詞を変えた俳句の SD プロフィール

6. 考察

SD プロフィールを見ることで、表現の違いにより印象が異なることは確認できた。しかし、「A」と「B」の比較では、有意差が見られなかった。これは、「や」などの切れ字を普段の生活で生徒が使用していないために、その効果を実感できないことが原因ではないかと考えた。そこで、T市の中学校国語科教師 10 名に対して「A」と「B」の俳句について SD アンケートを行った。図 3 はその SD プロフィールである。

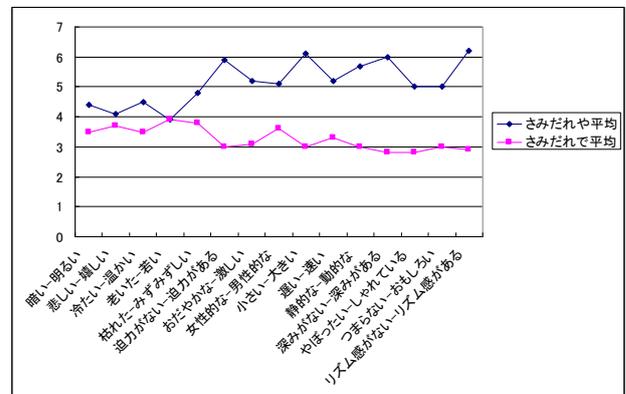


図3 切れ字を変えた俳句の SD プロフィール (教師)

生徒に行った SD アンケートの結果とは明らかに異なった結果が得られ、印象評定には有意差が見られた。 ($p<0.01$) この SD プロフィールを提示することによって、切れ字の効果について、生徒に客観的且つ具体的に理解させることが可能になった。

参考文献

- (1) 宮腰賢,石井正己:“新・国語の便覧”, pp.178, 正進社, 東京 (2011)
- (2) 皆川直凡:“俳句理解の心理学”, 北大路書房 (2005)
- (3) 豊瀬仁須他:”中学校和歌学習指導での和歌感性データベースの活用”, 日本教育工学会第 26 回講演論文集, pp.797-798 (2010)